

2025 年 9 月 26 日（金）開催 学術情報流通に関する連続セミナー 第 11 回
「研究情報のオープン化がもたらすもの：OpenAlex を用いたオープンアクセス分析」
当日取り上げられなかった質問への回答（一部）

質問 1：オープンアクセスについて、結局、最終稿をプレプリントとして公開していたり、研究者向け SNS で公開していたりしており、出版社に費用を支払ってオープンアクセス化しなくても、結果的に論文がアクセス可能な状態になっていくようなことはあるでしょうか。

回答 1：グリーン OA（機関リポジトリ・プレプリント）やダイヤモンド OA（研究機関や学協会、助成機関が費用を負担し、著者も読者も無料で利用できる OA）の拡大で、費用を払わずにアクセス可能になる例は増えています。

質問 2：「責任ある研究評価」は理想的だと思いますが、その実践には人手と時間がかかると思います。だからこそ簡便な Journal Impact Factor のような指標が根強く使われている側面もあるのではないのでしょうか。「責任ある研究評価」の実践に向けた、現実的な手法や仕組みの開発などは進んでいるのでしょうか？

回答 2：ご指摘の通り、責任ある研究評価の実践には、研究成果を多面的に捉えるための評価軸や仕組みを整える必要があります、その分負担が大きいという課題があります。そのため各国や大学では、定性的評価と定量的指標を組み合わせた仕組み（例：DORA 宣言に基づく評価指針）が進められています。また、分野別に正規化された指標やオープンデータを基盤とした新しい指標（例：CWTS の Leiden Ranking）も整備されつつあり、現実的な運用可能性は広がっています。

質問 3：OpenAlex と Scopus + SciVal の違いはなんのでしょうか？ 将来 OpenAlex ですべてカバーされるのでしょうか？

回答 3：Scopus は商業データベースで、包括的な収録と精度管理に強みがあります。SciVal は、その Scopus データを基盤に研究業績の可視化やトピック分析を行う研究評価分析ツールです。一方、OpenAlex には専用の可視化ツールはありませんが、研究分野の基盤となるトピック（concepts/Topic）が DB 自体に収録されているため、分析することは可能です。ただし現時点では OpenAlex 自体の収録範囲の偏りやメタデータの質の面で商業 DB に劣る部分もあります。今後は商業 DB の完全な代替というよりも、OpenAIRE など他のオープン基盤と組み合わせつつ、相互補完的に活用される形が現実的だと考えられます。

質問 4：OpenAlex は現状では利用するのに信頼性に不安があるものという印象を受けました。今後、信頼性を高める洗練されたものになっていくと思いますか？それとも淘汰されて結局商業データベースが利用されるようになっていくと思いますか？

回答 4：信頼性向上の動きは確実に進んでいます。OpenAlex は Crossref や ROR など他のオープン基盤と連携し、データ品質を改善しています。また、欧米の大学や研究機関が利用だけでなくデータ提供や連携協力を通じて基盤の改善に参加しており、利用者からのフィードバックによる改良も進展しています。商業 DB と比べて不安定さはあるようですが、淘汰されるのではなく、長所と限界を踏まえて活用されるオープン基盤として浸透していく可能性が高いと考えられます。

質問 5：ユトレヒト大学が Web of Science を中止して、Open Alex を代替えとして案内しているという記事を最近読んだのですが、このような動きは今後広がるのでしょうか？

回答 5：欧州の一部大学や研究機関ではすでに同様の動きが見られます。たとえば、フランス国立科学研究センター（CNRS）は Scopus の購読を終了し、政府と連携して OpenAlex を活用した完全オープンな書誌情報ツールの開発に投資しています。ソルボンヌ大学も Web of Science の購読を解約し、OpenAlex への投資を決断しました。またオランダの研究助成機関（NWO、ZonMw）は、助成研究の OA 率を透明に把握するためにオープンメタデータを積極的に活用しています。ただし、ユトレヒト大学の例のように Scopus は利用可能なまま OpenAlex を案内するケースもあり、完全移行は例外的です。今後は商業 DB との併用を前提としつつ、機関の方針や評価要件に応じて、オープン基盤へのシフトが段階的に広がる可能性があります。

質問 6：オープンアクセスの意義は理解できますが、オープンアクセスの進展よりも世界全体での論文数の増加が上回っているように感じられ、徒労感を感じる部分もあります。研究評価の潮流が変わることで、論文を出版することのインセンティブが下がればと思いますが、そういったことは期待できるのでしょうか。

回答 6：研究評価が量から質へと重点を移せば、論文数を増やすインセンティブは弱まります。近年の「責任ある研究評価」や「多様な研究成果の評価」への潮流は、数偏重を是正しようとするものです。こうした動きが広がれば、研究者が論文数のみを競う傾向は緩和される可能性があります。ただし、論文数以外の成果（データ共有、社会的インパクトなど）をどのように評価し、新たなインセンティブを設計するかが今後の課題となります。

質問 7：人文社会科学系のほうがオープンアクセスの効果は大きいと思うのですが、むしろオープンアクセスがすすんでいない気がします。データのオープンアクセス化も同様かと。当該分野でどのようにオープンアクセスの意義を浸透させていくことができるのでしょうか？

回答 7：ご指摘の通り、人文社会科学では書籍や地域雑誌を重視する出版文化や資金面の制約から、オープンアクセスの推進が進みにくい側面があります。ただし、地域

社会への知識普及や教育利用といった社会的意義は大きく、機関リポジトリでの公開や翻訳版の公開など、多様な形態での OA を支援することが効果的です。さらに、学協会や非営利出版社との連携など、分野特有の出版文化に即したインフラ支援も重要だと考えられます。